

「わらアート」ってなあに？

現在、古代蓮の里では酒巻14号墳から出土した国指定重要文化財「馬形埴輪」と、原始時代を象徴する生き物「マンモス」をモチーフにした「わらアート」を楽しむことができます。「わらアート」とは、稲わらを使った芸術作品のこと。角材や竹を用いて造られた骨組みに、乾燥させて編み込んだわらを取り付けて作成していきます（制作過程は4〜5ページ参照）。

この取り組みは、平成18年から岩室村（現新潟市西蒲区）で始まりました。岩室温泉観光協会と交流のあった武蔵野美術大学が協働で稲わらを活用した造形物を制作し、同区に展示したのです。それをきっかけに、毎年1作品を展示するように。平成20年度からは作品を制作・展示するとともに、地域の特産品販売や体験教室、ステージ上で歌や踊りなどを発表する「わらアートまつり」が毎年開催されています。また、「わらアート」は新潟市だけでなく、香川県小豆島で開催された瀬戸内国際芸術祭や愛媛県今治市にも登場するなど、その取り組みは徐々に広がっていきました。

見なきゃ損!?

行田のわらアート

市では、古代蓮の里の冬季の来場者数が増えないことが課題でした。その課題を解決すべく思い付いた事業が「わらアート」だったのです。

各地で「わらアート」を手掛けている同大学の宮島慎吾教授の指導の下、昨年12月に制作がスタート。市民ボランティアや同大学の学生、市職員ら1日20人が作品づくりに参加し、10日間かけて作成しました。馬形埴輪とマンモスには、田んぼアートの稲わら約1千700キログラムを使用。大きさは馬形埴輪が高さ7m・横8m・幅4m、マンモスが高さ5m・横6m・幅4mで、これまで最大の作品は高さ6mのものであることから、馬形埴輪はそれを1m上回り、日本一の大きさとなっています。

日本一大きな「わらアート」の展示期間は2月28日(日)までとなっています。「巨匠は一見にしかず」。大迫力の作品を実際にこの目で確かめて、「わらアート」のすてきな世界を体感してみたいいかがでしょうか。



**子どもから大人まで、みんなビックリ!!
わらアートまつりを開催**

巨大なオブジェに 大興奮

12月21日、「わらアートまつり」が開催され、完成したわらアートを一見しようと大勢の方が会場を訪れました。巨大な馬形埴輪とマンモスを目の当たりにした子供たちは、興奮した様子。オブジェをバックに記念撮影をしたり、作品に使用されている稲わらの感触を確かめたりして、すっかり「わらアート」に魅了されているようでした。また、餅つき大会やゼリーフライの無料配布、ミニ縁日も行われるなど、盛りだくさんの内容に来場者誰もが充実した時間を過ごしていました。

「わらアート」を見た方にインタビュー…「どんな感想を持ちましたか？」



川崎みね子さん、雄太くん、理楠ちゃん、晴香さん(埼玉)

田んぼアートの稲わらを使って、こんなに大きなものを作るなんてびっくりしています。想像をはるかに超えていました。クオリティも高く、すてきな作品だと思います。



柳澤利樹さん、直央ちゃん

鴻巣市から来ました。「わらアート」を見るのは初めてです。非常に完成度が高く、正直驚いています。息子も興奮しているようです。

田んぼアートのその次は…
「わらアート」だ!!

古代蓮の里に突如、巨大な馬形埴輪とマンモスのオブジェが登場。「一体これは何」。これは、わらを使った芸術作品「わらアート」です。今月は、新たな行田の見どころになった「わらアート」の完成までのプロセスや「わらアートまつり」の様子をレポートし、その魅力に迫ります。

ボランティアに参加した方の声

完成をイメージするとワクワクしました
仲松峯二さん(西新町)



市報で「わらアート」の制作ボランティアを募集する記事を見たときに、すぐに応募を決意しました。なぜなら、行田市民大学で「田んぼアート」をテーマにしたグループ研究に参加していたからです。あの稲わらをどのように使うと、巨大なオブジェになるのか非常に興味が湧きました。

私は、とば編み作業から参加しましたが、初めての経験で最初は戸惑いました。しかし、慣れてくると簡単にでき、仲間と楽しく作業を進めることができました。完成したものをイメージしながら手を動かしていると、とてもワクワクしていたのを思い出します。貴重な経験ができ、有意義な時間を過ごすことができました。

わがまちでの「わらアート」の制作に気合が入りました

制野郁弘さん(武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科2年・門井町)

「わらアートまつりを君の育ったまち、行田で開催するよ」この知らせを宮島教授から聞いたときに、うれしく感じました。それと同時に「やるしかない」と気合が入りましたね。



私は、とば編みしたものを骨組みに取り付ける作業とポスター作りに携わりました。作業は強風と寒さとの戦いでしたが、集中して作ったので、とてもいい作品ができたと思います。

以前に比べて行田市は、映画「のぼうの城」の公開や「田んぼアート」などで、活気があるまちだと感じています。「わらアート」制作ボランティアの一員として、自分がまちの活性化に関わっていると思うとうれしい気持ちになります。

ロマンチックな夜に 馬形埴輪とマンモスをライトアップ中!



2月28日(土)まで、ライトアップされた「わらアート」を楽しむことができます。日中とは一味違った雰囲気馬形埴輪とマンモスをご覧ください。※古代蓮の里イルミネーションは1月12日に終了しました。

▶問い合わせ 商工観光課観光担当(内線389)

わらアートができるまでを
完全レポート

「田んぼアートの稲からどうやってわらアートが作られているの?」そんな疑問を持つ方もいるかと思いますが。ここでは、巨大なオブジェに至るまでのプロセスを紹介します。



マンモスデータ:高さ5m、横6m、幅4m



馬形埴輪データ:高さ7m、横8m、幅4m



4

作成した骨組みに編んだ稲わらを取り付けて完成させる

12月16日から20日にかけて作業を行いました。参加したのは、市民ボランティアや武蔵野美術大学の学生など。強風や雪に耐えられるように、丁寧に麻ひもで稲わらを取り付けました。



3

わらアートの基礎となる骨組みを作成する



建築士が設計を担当。曲線部分は竹を使用するところがポイントです。

2

刈り取った稲わらを乾燥させ、編み込む

作業期間は12月1日~5日の5日間。市民ボランティアが中心となって実施しました(下の写真は「とば編み」作業の様子)。



1

田んぼアートの稲を刈り取る

田んぼアート米作り稲刈り体験事業に約250人が参加。刈り取った稲わらを使用した巨大なオブジェの作成に取り掛かりました。



わらアートの創始者に
インタビュー



宮島慎吾さん(武蔵野美術大学基礎デザイン学科教授)

世界「巨大な「わらアート」を堪能してほしく

「札幌市で毎年開催される雪祭りにあやかりたい」そんな思いがあつて「わらアート」を始めました。

私は、「日本は米の国」だと思っています。古くから米の豊作を祈願し、米が食べられることに感謝するといった儀式や風習があります。日本にとって米は、日々の生活様式に深く関わる特別な存在といえるのではないのでしょうか。そういう意味で収穫した後の稲わらを廃棄せずに、造形物に利用することはとてもよい取り組みだと思っています。

これまで新潟市西蒲区の外に、小豆島の瀬戸内国際芸術祭や今治市などでわらアートを展示しました。どの会場も、わらアートを見

た子供たちはみんな楽しそうな表情を浮かべていました。その姿を見ると、いつも心が和みます。

行田のわらアートの展示は首都圏初の試みです。学生とボランティアが一緒になって日本一、つまり世界一大きなものを作ることを目指して作品づくりに励みました。作品を見た方に、必ず満足してもらえたいと思います。まだご覧になっていない方は、ぜひダイナミックな馬形埴輪とマンモスの魅力に触れてもらいたいです。